鹿児島市立桜丘中学校
令和4年2月18日

第11号

「平和の祭典」から学ぶこと

校長　上久保大介

古代オリンピックが開かれていた古代ギリシャでは、４年間を「オリンピアード」という“年代の基準”にしていたそうですが、そのことにちなんで、オリンピックは４年に１回の開催になったそうです。しかし、アスリートにとっては、**４年ごとの緊張**は半端なく、その結果、選手だけではなく、スタッフや審判を巻き込んで**様々なドラマが生まれます。**

今年の**北京オリンピック**では、考えさせられることがたくさんありました。例えば、**スキージャンプ混合団体の高梨沙羅選手のスーツ規定違反の件**については、様々な疑義や怒りの声が上がっていますが、私は少し違った感じ方をしています。**選手やスタッフは勝つために精一杯の努力をし、正々堂々と競技に参加**したはずです。それは**スーツの検査員も同じで、不正がないよう責任を持って検査をしていた**はずです。そう考えると、それぞれが**自分の仕事をきちんとやっていた**だけで、誰が悪かったというわけではないと思えるのです。しかし、不満や不信感は噴出しました。ただ、**これまでと検査方法が違ったという報道**が正しければ、そのことを**事前に伝えていたかどうか**については、私たちも教師として考えさせられることがあります。私たちは普段、指導したあとに活動させています。しかし、もしかしたら何も教えず、とりあえずやらせてみて、失敗をさせたあと指導しているようなことはないのか、と思ったのです。教育方法論的に言えば意図的にそのようにすることもありますが、**「育てるための指導」**が**「指導するための活動」**になってはいないかという当たり前のことを振り返るきっかけになりました。ご家庭ではいかがですか。**「子供を信じて何も教えず冒険させる」**ことと、**「教えてから、子供を信じて冒険させる」**ことは全然違います。

フィギュアスケートの羽生結弦選手の場合は、運悪く氷の穴に足を取られてしまい、クワッドアクセル（４回転半ジャンプ）を失敗してしまいました。しかし、羽生選手は失敗の**原因を他者に求めず、「自分は正しい努力をしてきた」**とだけ述べています。高梨選手も**自らを責める言葉**だけを述べています。これは、日本人としての美徳とか、他者の責任を問う姿が良いとか悪いとかの話ではなく、この２人が、これまで**責任のある行動**をし、どれだけ**自分に誇れる努力**を積み重ねてきたかを示す、心の表れのような気がします。

私たちは目の前の子供たちに、**正しい努力をさせているか**。正しい努力の積み重ねに疲れたとき、**そっと優しい手をさしのべているか**。自分自身の教育や子育てを振り返ったとき、少しだけ恥ずかしくなりました。

願わくば**「平和の祭典」**が**「諍い（いさかい）の採点」**にならないよう願っています。